

学位論文の要旨	
氏名	韓 艶麗
学位論文題目	内モンゴル農耕地域における「伝統文化」の形成と変容 —通遼市における婚姻習俗を事例として
<p>本論で主に、「伝統文化」を、歴史関連の本、テレビ等のマスコミを中心に流布している表象群である「伝統文化 A」と現地の人たちにより実践された習俗である「伝統文化 B」と分け、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」を比較し、「伝統文化 B」の位置づけ、重要性を解明した。それと同時に、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランスを保ちつつ、一つの民族、国家が健全に発展することの重要性を示した。</p> <p>「伝統文化」と言えば、地域や国を問わず、まず言及されるのは「伝統文化 A」であり、「伝統文化 A」が「権力」的作用して一つの民族、一つの国家のイメージを構成している。その一方「伝統文化 B」は、本やテレビなどに宣伝していないので、人々に認識されなくなる恐れがある。さらに、現代社会では日常的な文化さえも忘却される傾向が見られ、「伝統文化 A」の肥大化したイメージが、モンゴル族の現状との間に食い違いを見せている。そのため、「伝統文化 B」という現地人の実践された習俗を記録し、後代に伝えることに大きな意義が生じる。それによって、ひとつの国、ひとつの民族に関してワンパターンのイメージとは異なる、より現実に近いイメージを提供できると筆者は考えている。さらに「伝統文化 B」を伝え、知ることによって、一つの民族や国のことを素直に理解でき、今後の紛争や戦争を避けることができるという点にも本研究の価値がある。</p> <p>第一章では、内モンゴル東部地域のモンゴル人村落が形成された過程を論じ、漢人が形成した村落とモンゴル人が形成した村落を比較し、モンゴル人が形成した村落の特徴を解明した。その結果、内モンゴル東部地域のモンゴル人村落は、漢人が形成した村落とは居住している空間的な面から見ても、移住関係、親戚関係、姻族関係、農業形態の経済関係から見ても相当異なることが明らかになった。さらにモンゴル族に関する「伝統文化 A」について検討し、「伝統文化 B」の形成過程を述べ、両者を比較した結果、農耕モンゴル人の「伝統文化 B」は村落形成後、定住生活や農業といった、時代、地域の状況に合わせて、柔軟な対応をとることで、独特な文化を形成してきたことが明らかになった。</p> <p>第二章では、1950年代から2000年代までの農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗の事例を考察して、婚姻習俗の連続性や変化を検討した。さらに農耕モンゴル人に関する婚姻習俗</p>	

の本に書かれている内容を、筆者が調査した事例と比較し、その結果、前者は農耕モンゴル人の実態とは整合しない状況が明らかになった。農耕モンゴル人を牧畜地域の生活、つまり草原、牧畜生活、羊肉食などの「公認」されている「伝統文化 A」に近づけて表象しているのである。つまり、農耕モンゴル人の実態を取り上げていない。また、当該地域の人たちは、「伝統文化 B」を自覚せず、否定している問題が存在することを解明した。

第三章では、現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を提示し、その事例を第二章で提示した 2000 年以前の婚姻習俗の事例と比較した。その結果、現在は結婚披露宴を、地元で一度実施してから、都会の勤務地で再び実施する人が多くなってきたため、結婚披露宴が婚姻習俗の中で重要な地位を占め、業者に頼むようになってきていることが判明した。また、「モンゴル風」の結婚披露宴が流行しているが、これは国家の民族政策や、インターネットなどの情報発信と関係があると思われる。

第四章では、「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者と業者の事例を取り扱い、考察した。その結果、都会の農耕モンゴル人の司会者たちは、歴史の本、テレビマスコミ、ホルチン文化などをまとめて、「伝統文化 A」＋「漢族文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「西洋文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「権威付けされたホルチン文化」といった「異種混合」的な文化を形成し、新たな「伝統文化」を創出していることが明らかになった。そして、お互いの強いネットワークを通して、司会者たちがいう、婚姻習俗の「伝統文化」を流通させ、伝播させている。それは、ネットワークを通じて大都会から小規模の都市、地方にまで影響を与えている。つまり、農耕モンゴル人の都会発の「伝統文化」の創造は「伝統文化 A」に「権威付けされたホルチン文化」を差し込む形で定着つつある。一方、農耕地域の地方では、「伝統文化 B」に「伝統文化 A」を差し込むか、「伝統文化 A」を広める形で文化を創造している。

第五章では、都市の結婚披露宴でモンゴル族の「伝統文化」を取り入れている意味を太田氏の文化の客体化の概念を借用して論じた。また、農耕地域独自の「伝統文化 B」の位置づけ、重要性を解明し、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランスのよさを保つべきであることを指摘した。つまり、「伝統文化 A」のみを偏って強調すると、独自性の強い「伝統文化 B」を持つ地域の人々が、離脱、孤立させられるなどの弊害が生じる。その一方で、「伝統文化 B」ばかりを全国、さらに外国に広めると、ひとつの国のイメージがなくなり、国や民族がばらばらになってしまう危険性があるため、国であれ、民族であれ、「伝統文化 A」としての民族の精神、イメージを作らないといけないのも事実である。それゆえ、「伝統文化 A」「伝統文化 B」どちらも、無視せず、バランスを保つことが大事である。